

2016年度教師海外研修(パラグアイ) 研修報告書

| | | | |
|-----|-------------|----|------|
| 学校名 | 春日井市立鳥居松小学校 | 氏名 | 油浅重里 |
|-----|-------------|----|------|

<印象に残る写真2点>

●写真1 [3776]

幸せの在り方

ホームステイをさせて頂いたイリさん一家との1枚。人とのつながりを大切にするパラグアイの人々と接して、大切な人と共に過ごす時間の尊さについて考えさせられた。



●写真2 [6714]

貧困地区の実態

都市部のビル群と隣り合わせで存在する最貧困カテウラ地区。簡単には解決しない問題がそこにあることを実感した。私たちはどう向き合い、行動すればいいだろうか。



1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

現地研修に対する最も大きな目標は、視野を広げ、自分自身を成長させることであった。現地研修を共にした仲間はもちろん、パラグアイで出会った青年海外協力隊の方、ホームステイ先のご家族のみなさん、訪問先で出会った子どもたちや先生方との交流や、今まで知る機会がなかったことについて学ぶこと、行ったことのない場所を訪れることなどの多くの経験を通して、これまでの自分の視野を広げることができたと感じている。現地地ではできない貴重な経験をさせて頂いたことで、子どもたちにも実感を込めて語るができるため、授業実践をする上でも大きな役割を果たすと感じている。また、現地地では集めることのできない教材も十分に集めることができ、子どもたちが世界を感じる上で貴重な役割を果たすと考えている。そして、パラグアイの小学校で活動する青年海外協力隊の方とのつながりを通して、パラグアイと日本の子どもたちをつなぎ、子どもたちにとって世界を身近に感じる機会を与えることができたらと思う。

2. 訪問国から学んだこと (気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

正直、現地を訪れるまではパラグアイという国がどんな国なのかほとんど知らなかった。しかし、その何も知らなかったということがかえってよかったのかもしれないという思いがある。様々な情報による偏った先入観をもつことなく、パラグアイという国に出会うことができたからである。そんな出会い方をしたため、パラグアイの素晴らしいところをたくさん感じる事ができたのだと思う。情報が溢れる現代では、正しい情報も偏った情報も簡単に耳に入ってしまう、実際にその国を訪れたり、その国の人と触れ合ったりする前に先入観やステレオタイプが形成されやすい。だからこそ、どんな国に対しても多面的な見方をすることを忘れてはいけないと思う。また、自国の文化を大切に思うのと同じように、他国の文化も尊重し、その違いを楽しむ姿勢も大切ではないかと考える。そして、いつも自分自身が他者や異文化に対して心を開き、多様性を受け入れる気持ちでいられたら、どんな国とも肯定的に出会っていくことができるのではないかなと思う。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

今回の現地研修で、日本とパラグアイとのつながりを多くの場面で感じた。パラグアイには約5,800人の日系人社会がある。1936年に日本からパラグアイへの移住が開始されてから、今年で80周年を迎える。現地には日系のホテルやレストランも多く、おいしい日本食も食べることができる。また、日本語学校では日本語や日本文化の伝承が行われ、日系人社会にとって大きな役割を果たしている。人としての同一性に気づかされる場面も多々あった。今回の研修では、訪問先で出会った人たちに「大切なものは何ですか？」という共通の質問をしたが、そこで人としての共通点が見えてきた。子どもから大人まで、この質問をすると「家族」や「友人」など、人とのつながりやかけがえのないものとして挙げるものが多かったのである。そんな答えの数々を聞きながら、もしかするとどの国でも同じではないだろうかという思いにかられた。やはり最後の最後に人が求めるものとは、人のぬくもりやつながりなのかもしれないと考えさせられた。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

今回の研修では、パラグアイの学校も数多く訪問させて頂いた。現地の先生方と意見交換をする中で、パラグアイと日本との共通の課題が見えてきた。それは、家庭教育力についてである。子どもの発達を考える上で、家庭教育は学校教育と共に大変重要な役割を担っていると考える。子どもが家庭や学校で安心して過ごし、そのままの自分を認めることができこそ、周りの人に思いを馳せることができるのではないだろうか。持続可能な社会を目指し、様々なグローバル 이슈に向き合おうとする時、自尊感情の高い子どもを育てていくことは大変重要である。それぞれの子どもの家庭環境は様々であるが、学校と連携することで、家庭教育力の底上げができれば、毎日を満たされた気持ちで過ごせる子どもが1人でも多くなり、様々な価値観を認め、周りの人に思いやりをもって接することのできる、自尊感情の高い子どもが育つのではないだろうか。パラグアイでの経験は、そのために教師としての自分に何ができるのかを改めて考えるきっかけを与えてくれた。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

JICAの国際協力事業で印象に残っているのは、子どもたちに関わる活動である。サン・ミゲル特殊教育センターで障害児・者支援活動を行う青年海外協力隊の渡辺さんは、パラグアイの障害児・者支援において新しい価値観を提供しているように感じた。渡辺さんは子どもたち1人1人の個性を大切にし、様々な活動を通して毎日を楽しく過ごせるよう、先生方を巻き込んで活動されていた。またメルセデス・ミルトス小学校で教育活動を行う青年海外協力隊の都倉さんは、算数科を中心に様々な教材の開発に尽力されていた。日本のようにどんな教材も買えばすぐに手に入る環境でない中、どのように工夫すれば子どもたちにとってわかりやすい授業ができるかを追求する姿が素晴らしかった。今後は、特別支援教育の専門的知識をもった教員がパラグアイで増えていくよう、日本から指導できる専門家を派遣していく活動がより充実していくといいのではないだろう

うか。そして、政府が目指すインクルーシブ教育が具体的に実現されるといいと思う。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

⑤ イグアス湖流域総合管理体制強化プロジェクト [油浅／安藤]

イグアス湖流域総合管理体制強化プロジェクトは、パラグアイで主となる水力発電による電力の供給と周辺の自然環境を守っていくという、持続可能な未来を目指す取り組みである。そのプロジェクトの一環で、パラグアイ国電力公社 ANDE と連携し、環境保全型農業の実践に取り組むモデル農家のシシリアさん一家を訪ねた。シシリアさんは環境保全を積極的に進め、持続可能な未来をつくっていくことに大変熱い情熱をもった方だった。不可能と言われた無農薬のいちご栽培に成功するなど、環境保全は知恵と工夫次第で実現可能であることを実際に示していた。このプロジェクトは、新しい価値観を提唱していくパラダイムシフト型のプロジェクトと呼ばれている。これまでの世界の経済発展の在り方は、決して持続可能なものとは言えなかった。今まさに経済発展を遂げようとしているパラグアイは、未来のための新しい経済発展の仕方を世界に提唱することができるのではないかと感じた。(油浅重里)

⑧ モンダウの滝 [児玉／油浅]

パラグアイとブラジルの国境を結ぶ地点からほど近い場所に、パラグアイの瀑布として有名なモンダウの滝がある。「モンダウ」とは、現地語であるグアラニー語で「住民の水」という意味で、昔は人々の休憩場所として一役買っていたとのこと。その名の通り、現在も人々の憩いの場となっている。高さ40mある滝は、近くで見ると大変迫力があり、岩に当たる白い水しぶきが豪快で、日本ではなかなか感じられない南米ならではの大自然を感じることができた。また、モンダウの滝周辺には森が広がり、美しい緑を眺めながら散策できるようになっている。モンダウの滝は、パラグアイに来て初めて仲間と共に訪れた観光地だった。他の訪問先とは違い、時間と気持ちに余裕をもって観光することができたので、ゆったりとしたよい時間を過ごすことができた。研修も中間地点であったこの日、通訳のエリカさんや運転手のグスタボさんも一緒に、12人でたくさん笑って過ごした時間は、心に残るものとなった。(油浅重里)

⑨ パラグアイ人宅でのホームステイ [全員]

私がホームステイさせて頂いたのは、元音楽教師であるイリさんのお宅だった。イリさんの娘さんは日系の方と結婚されており、家庭の中では日本語が使われることもあった。イリさんははじめ、お父さん、娘さん、息子さん、みんなで私たちを温かく迎えてくれ、家の周辺を案内してくれたり、パラグアイの伝統料理をふるまってくれたり、とても有意義で楽しい時間を過ごすことができた。ホームステイで印象に残っているのは、パラグアイの人々の共有精神である。イリさん一家と接していて、様々な場面で「みんなで一緒に」「みんなで助け合っ」という精神が根付いていると感じた。家族揃って食事をする、日曜日は家族や親戚みんなで掃除をする、親戚みんなで子どもたちの面倒をみるなど、日本では希薄になりがちな人とのつながりの深さを強く感じた。新しいものや便利なものにあふれ、何不自由なく生活できる環境ではないが、大切な人と過ごす充実した毎日の在り方に感銘を受け、日本での自分の生活を振り返るよい機会となった。(油浅重里)

⑭ 小規模ゴマ栽培農家支援のための優良種子生産強化プロジェクト [油浅／笹ヶ瀬]

小規模ゴマ栽培農家支援のための優良種子生産強化プロジェクトは、小規模農家に向けた質のよい種子の安定的な供給や、栽培技術の向上を目的とした取り組みである。パラグアイで栽培されるごまの大半は日本への輸出向けであるが、ゴマのようなマイナー作物の先進国への輸出は、クリアしなければならない課題がいくつかある。そのうちの1つが、食品の安全性に関する問題である。農家に向けた指導はもちろんのこと、パラグ

アイにおける食品の安全管理のための検査基準をつくっていくことも、このプロジェクトの大きな目的である。パラグアイにおいて、食品の高い安全性や品質におけるニーズは現時点では少ない。そのため、安全性や品質に高い関心がある日本のような先進国との間にギャップがあり、様々な問題が生じるのである。国の仕組みそのものを変えていくこのプロジェクトは、これから経済発展をしようとするパラグアイにとっても、輸入国である日本にとっても、大変意味深いものであると感じた。(油浅重里)

⑳ 在パラグアイ日本大使館 [笹ヶ瀬／油浅]

在パラグアイ日本大使館では、JICA 東北教師海外研修受講者の方と共に上田義久大使に直接今回の教師海外研修について報告をする機会を頂いた。受講者はそれぞれ、今回の教師海外研修で印象に残っていることについて語った。私自身は、白沢商工株式会社の見学について報告をした。白沢社長がパラグアイの小規模農家の貧困撲滅を目的にゴマの栽培に取り組むようになったこと、そして白沢社長が語る「トライすることの大切さを知ってほしい」という日本の子どもたちに向けてのメッセージが心に響いたからである。今回の研修では、日本から遠く離れたパラグアイの地で奮闘されている青年海外協力隊の方、シニア海外ボランティアの方、JICA パラグアイ事務所の方、白沢商工株式会社の方など、たくさんの日本人の方とお会いして大きなパワーを頂いた。自分が日本人であること、そのアイデンティティに誇りをもち、これから世界の人とどのようにつながり、自分に何ができるのか、これからも考え続けていきたいと思う。(油浅重里)

㉑ JICA パラグアイ事務所報告会 [油浅／安藤]

日本への帰国日、私たちはJICA パラグアイ事務所で今回の教師海外研修の振り返りを行った。竹村雄一職員に向けて1人1人が研修全体を通して感じたことや学んだことを報告し、全体で思いを共有した。1人1人の視点や感じたことは異なるが、全員に共通していたのは、この研修を通して多くのことを感じ、学び、考え、自分自身に何らかの変化があったということである。それぞれが学びを語る姿を見て、受講者1人1人が熱い思いをもって今回の研修に参加したことを改めて感じ、「体感」することの重要性を再認識した。世界共通の幸せを考えたときの基準となるSDGsは、今後地球に暮らす私たち全員が目指していくべき目標である。この目標を達成していくために教師としての私たちにできることは、自分自身がよりよい未来について考え、学び続けること、そして子どもたちにその重要性を伝えていくことだと思う。パラグアイでの教師海外研修を受け入れて下さった吉田英之所長、竹村雄一職員には、改めて感謝の気持ちをお伝えしたい。(油浅重里)

5. 来年度参加する先生へのアドバイス (持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など)

安全第一、健康第一で、無事に全員が行って帰ってくることが最優先なので、事前の体調管理はもちろん、つい頑張りすぎてしまいがちな研修中も、体力的、精神的に無理をしないことが1番である。持ち物についても、現地の気候や体調に合わせて着脱ができるような服装、食べ物が合わなかった場合の非常食は持っていくことをおすすめする。現地に持って行って特に役立ったのはビーチサンダルである。ホテル、ホームステイ先で入浴するとき、非常に役立った。

また研修中に自分自身の目的を見失わないよう、余裕をもって事前準備をしておくことが大切である。事前に計画していた活動や質問、インタビューなどはすべてできるわけではないので、現地ではやれることを無理せず精一杯やろうというおおらかな気持ちで、現地の人と直接コミュニケーションをとる時間を最優先にして過ごすのがよい。研修前はいろいろな不安があると思うが、なんとかなるといふ気持ちで受講者同士励まし合い、思い切り楽しむのが最も大切である。

6. その他全般を通じての感想・意見など

今回パラグアイでの教師海外研修に参加して、私自身に気づきや変化があった。それは、パラグアイの人々

と接して、幸せの在り方について考えさせられたことが最も影響していると思う。持続可能な未来を考えたとき、そのために必要なことをずっと考えてきた。その中でも日本人としてできることを考えたとき、どこか他の国に対し、足りないものを補ってあげるという発想が先行していたように思う。しかし、どの国においても、どんな環境で暮らしていても、その土地にはそこで大切にしている価値観があり、幸せに暮らしている人もいる。日本人として何か世界に対してアクションを起こそうとするとき、それが現地の人々にとって本当に望まれるものであるか、価値観の押しつけになってはいないか、時として振り返ることも必要なのかもしれない。そう感じたことは、世界中の人々が笑顔で暮らすために必要なことって何だろう、幸せって何だろうと、改めて考えるきっかけになった。答えはまだ出ないが、これからも考え続けていきたい課題である。

以上

